

風雅の種（一）

土田龍太郎

芭蕉庵桃亞青の分け入りし風雅の道の奥か深く幽かそけきことよなければ、とみには明めがたく、おほかたのさかしら人のえ至るさかひにあらざるは言ふもおろかなり。

この芭蕉翁時に來し方を顧て、狂句に寄するおのがひたぶる心を述べしことたえてなきにあらねど、翁みづから記せし文の今に遺れるが中に風雅の道のことわりだてて説けるところをさをさ見出がたきぞいともあかぬ心地せらるるなる。

芭蕉翁のつねに思ひ凝らしてやまざりけむ俳諧の不易と流行のこと知らぬ人としては世に稀なるめれども、芭蕉遺文集のたぐひに定かにはえ伺ふまじきこの不易流行説の今に傳はりぬるは、むねと去來土芳ら門人の祖述のいさをを負へりと言ひて誤りなきにたり。

芭風俳諧者の筆になりし草子の内にてことにゆるがせにすまじきは、蓑蟲庵服部土芳のものせる三冊子にほかならで、この草子げにくさぐさのことに説き及べれど、芭蕉翁打聞といひつべきところここかしこうちまじりぬれば、風雅に志せるともがらのをりにつけて披き見ることなかりせばなかくちをしからましとぞおぼゆるなる。

師の風雅に萬代不易あり、一時の變化あり。

てふ句もて筆を起せる赤冊子の初めにて不易流行を説けることいともねもころにてこよなくめでたけれども、土芳のこの論あげつらひおほかたはをりに師の口よりふと出づるままに聞きおける言の葉をさながら綴りなせしものなること疑ひなし。

この不易流行論にただに續けて、さらに師の説とて土芳の云へらく、

乾坤の變は風雅のたねなりといへり。靜なるものは不變の姿なり。動くものは變なり。時としてとめざればとどまらず。止るといふは見とめ聞とむるなり。飛花落葉の散亂いるも、その中にして見とめ聞とめざればをさまることなし。その活いきたる物だに消て跡なし。

げにここにて芭蕉翁、一期の風懐のきはまるところをわづか百字あまりもてさながら述べてほぼつくせりと言はむも誤りなかるべし。ここに説けるおもむき奥深きこといみじければ、読みもてゆくままにゆかしさつのりくる心地して蕉風讃仰の思ひいや新たなり。

(令和三年六月二十三日受附)